「キッチュ」から見えてくる公共図書館の現状

The present report of public libraries which can be seen from Kitsch

和　知　　剛※
WACHI Tsuyoshi

In this country's public library management, while many excellent practices that can not be mentioned in this paper are being made, on the other hand there is a situation where the kitsch using the stereotype of public libraries is starting to be seen. The CCC library skillfully uses stereotypes to show its feeling as though it is acquiring the universality as a public library, but while considering "public" in civil society When recognizing it, the problem of being a musketeer will be further clarified in the future.

On the other hand, when the academism as opposition speech in the legendary falls into the fall of Kitsch, there is lost recognition to "public" as well as a desire for homogenization of emotions and a desire for relief to stand up, ideological support for public libraries, The ethical foundation is beginning to shake. As well as those who tried to counter fascism tend to fall into fascism, those trying to counter Kitsch may also fall into Kitsch.

はじめに

この20年あまり，この国の文化行政においても新自由主義（Neoliberalism）[1]に基づいた政策が唱導されている。このことは地方自治体による公共図書館の経営においても例外ではなく，新自由主義的な経営施策と，それに抵抗する公共図書館業界と市民の「運動」[2]が公共図書館を巡ってせめぎあっているのが現状である。

筆者の見るところ，図書館業界における公共図書館経営を巡る過去の議論の中には，すでに新自由主義への萌芽を内包しているものがあった。いわゆる「貸出至上主義」[3]と呼ばれる運動論がそれである。貸出至上主義は1970年代から80年代にかけて公共図書館の発展を主導した政策提言であった『市民の図書館』[4]から出発した考え方であるが，「貸出し」[5]が普及したのちの公共図書館像を戦略的にも戦術的にも提示することができず，その思想と実践は次第に行き詰まっていく。

『市民の図書館』と貸出至上主義が行き詰まっていく中，公共図書館の経営について様々な戦術が試みられていく。ここではその個々についての言及は省くが，それらの多くはもはや「貸出し」を公共図書館の達成すべき最大の目標に据えるものではなく，地域住民の多様な要

※　郡山女子大学図書館

望に応えるべく公共図書館がそれぞれに取り組んでいったものであった。現在もなお，そのような取り組みを継続して行っている公共図書館は多く存在する。

しかし，2003年に公共図書館にも導入されることになった指定管理者制度は結果的に，貸出至上主義によって公共図書館にもたらされた新自由主義的な公共図書館の運動論を引き継ぐ形で「貸出し」カウンターを重視し，レファレンスサービスなどその他の方法による資料の提供を二の次として図書館業務の効率化を図る（効率化は新自由主義においても重要な観点である）戦術をとる。この指定管理者制度を軸にして，制度を利用して公共図書館業務への進出を図る企業と，制度に反対し公共図書館の「正統」[6]を堅持しようとする運動の間で，様々なせめぎあいが起きているのが，現在の公共図書館経営を巡る，もうひとつの現状である。

この「もうひとつの現状」を巡り，その両極端な事例が，実際には公共図書館の経営あるいは公共図書館運動の「キッチュ」（まがいもの）であるにもかかわらず影響を及ぼしている例を取り上げ，現在の公共図書館経営の問題点を概観することが，本稿の目的である。

なぜ「キッチュ」は影響力を持ちうるのか

キッチュは，日本語では「まがいもの」「げてもの」と翻訳される。「げてもの」としてのキッチュについては石子順造[7]の先駆的な業績により，日本では一定の評価がなされている。本章では「まがいもの」としてのキッチュについて，それがなぜ現代社会に影響力を持ちうるのか，について考察する。

「まがいもの」としてのキッチュ[8]が現代社会において影響力を持ちうるには，群衆，専制，歴史，宣伝などの要因が絡んでいると考えられる。群衆は「ひとつの傾向」であり，それは情念の均質化を伴うことにより，均質化に同調しない他者の排除や差別がそこに起きる。そこに平井正が『ゲッベルス：メディア時代の政治宣伝』[9]において指摘する「救済者願望」が重なり合わされたとき，群衆の意思は神話と化した指導者の情念と行動に対する均質化への願望に加えて，指導者による「救済」への期待が高まることになる。そこに「まがいもの」としてのキッチュが台頭する機会が生み出されるのではないか。

これらの要因によりキッチュが神話化，あるいは神格化[10]したとき，キッチュは現代社会に影響を及ぼし，「正統」とそれまで捉えられてきた制度を倫理の側から切り崩していくことになる。そのことが，公共図書館の経営を巡る様々な軋轢（あつれき）の中で形をなしつつあるのではないか。以下にそれと考えられる象徴的な事例を挙げる。

公共図書館経営におけるキッチュ

本稿で言う「CCC図書館」，いわゆる「ツタヤ図書館」と巷間（こうかん）称されている公共図書館は，カルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）が公共図書館の指定管理者として業務委託を受

け，それまであった施設を代官山蔦屋書店風に内装を改装（ところによっては新築時に代官山蔦屋書店風に内装を工事）して開館した公共図書館である。

CCC図書館については，これまでも様々な評価[11]がなされている。著者は2016年３月に宮城県多賀城市に新築開館したCCC図書館を開館直後に訪問し，CCC図書館の特徴を確認した。筆者の見た多賀城市のCCC図書館は，次の理由から公共図書館としての機能性に問題があると考えられる[12]。

１）資料の排架

美観重視のためか参考図書が頭上の書架に排架されている，CCC図書館が採用している独自分類に基づく排架がなされている，などの理由により，図書館の所蔵する資料が探しにくく使いにくいこと。あてのないブラウジングで読みたい本を発見するのが困難。総じて本を資料としてではなく，装飾として扱っている気配が濃厚である。

２）館内の照明

長期滞在のための空間として併設されているカフェの居住性を相対的に強調するためか（実際，カフェのある場所は吹き抜けで明るい環境である），館内は薄暗く資料の利用，読書のための長時間の滞在には向いていない。

３）地域資料の扱い方

さして古いものではなさそうな地域資料の一部がオーディオ機器を収納するテレビ台の一種によく似たガラス張りの書架に収められている。展示物として資料の内容が説明されているわけでもなく，その位置づけは不明。

ここに例示したCCC図書館の様相は，「正統」がもたらした公共図書館のステレオタイプを利用したキッチュと見ることができる。それは需要を喚起し消費することを目的とする企業にはふさわしいかもしれないが，書籍や情報の形になった先人の知識を収集・提供・保存するという公共図書館の機能に対する「正統」な認識を逸脱し，その持つべき「公共性」を喪失しているものと考えられる。日経ＭＪ紙に掲載されたCCC社長のインタビュー[13]は，筆者の見方を補強するものであったとしても，否定するものではない。公共，もしくは公共善の補助線として存在が求められているのであろう公共図書館を，新自由主義的政策を実現するための道具として取り扱うとき，CCC図書館は公共図書館のキッチュとしてその役割を果たし，それを受け入れる住民もいることが，『市民の図書館』を「正典（Canon）」と任ずる公共図書館関係者にとって敗北であるのかどうか。次に見る公共図書館を巡る論壇の現状を鑑みると，公共図

書館を巡る議論もまた「公共」を失いつつあるのではないかとの危惧は消えない。

公共図書館を巡る論壇におけるキッチュ

『市民の図書館』は1970年代から90年代の初めにかけて，公共図書館経営の戦術指南として，その発展の理論的な主柱のひとつとなった政策文書であった。そして，『中小都市における公共図書館の運営』[14]及び『市民の図書館』という，この国の公共図書館経営を方向づけたふたつの政策文書の作成に関わり，日野市立図書館の経営にあたって辣腕をふるい，のちには滋賀県立図書館の館長として自らが打ち立てた『市民の図書館』モデルの公共図書館経営を滋賀県下に広めたのが前川恒雄である。

その前川恒雄の評伝として先日『前川恒雄と滋賀県立図書館の時代』[15]という本が出版された。この本は，その著者である田井郁久雄氏が前川に直接インタビューを重ね，その記録を再構成するとともに，前川の功績についてだけではなく，前川が対処しようとしてきたこの国の社会と公共図書館をめぐる，そのときどきの状況について田井氏の私見が交えられる，という体裁をとっている。評伝としては破格のものと思われるが，公共図書館とその運動に対する木鐸たらんことを目指した本でもあるようである。

この本は，前川自身が語ろうとしてこなかった滋賀県立図書館での前川の業績や逸話を詳しく述べており，その限りにおいては意義のある文献であるが，それに交えてところどころに挿入される田井氏の私見が資料としての価値を損なっている。田井氏は己の私見が前川の意見に二重写しとなっているのかもしれない。そうであっても，開館日と閉館日をめぐる議論についてであるとか，ビジネス支援についてであるとか，前川の評伝で展開する必要のない田井氏の私見は，別の媒体あるいは記事で展開されるべきものであろう。また，本書に登場する人物の扱い方が，ほぼすべて前川の引き立て役として描かれるにとどまっているのは，本書の欠点の一つだと思われる。

筆者は『前川恒雄と滋賀県立図書館の時代』について，参考にすべき点もあるが瑕疵(かし)もある，という立場をとるが，いくつか現れた書評の中には瑕疵に触れることなく同書に高い評価を与えているものがある。それらの書評の中で筆者が注目したのは，山口源治郎氏による「戦後公立図書館発展史の中の前川恒雄さんの実践と思想」[16]である。前川恒雄を神格化する救済者願望的な立場から書かれた書評だが，ここで山口氏は次のように書く。

> 図書館研究の業界には『市民の図書館』とその執筆者である前川さんの言説を，「貸出至上主義」と批判する人々がいる。このような人々は『市民の図書館』を実際に読み，前川さんの実践や言説を十分理解した上で批判しているのかと，疑問に思うことがある。自己に都合のよい『市民の図書館』像を勝手に作りあげ，前川さんの言説の一部を切り取って批判し

ているとすれば，図書館研究としての科学性も信頼性も無くしてしまうことになる。[17)]

筆者はここで批判されている貸出至上主義批判者[18)]のひとりである。『前川恒雄と滋賀県立図書館の時代』における田井氏の私見の披露も含めて，「貸出至上主義批判」批判には，山口氏の文章に見られるように，自らのテキスト読解以外の読みを認めず，貸出至上主義批判に認識不足のレッテルを張り，多様な意見を検討しようとすらしない情念の均質化への志向の現出があり，山口氏自身が言及している「科学性」の欠如がある。

アカデミズムが『市民の図書館』を「正典」として扱い，批判を許さない姿勢をとることは，「公共」を認識している近代市民が担う民主制下の社会科学をめぐる議論としては成立し得ない，まがいものとしてのキッチュそのものであろう。

おわりに

以上見てきたように，この国の公共図書館経営においては現在，本稿では触れることのできなかった多くのすぐれた実践がなされている一方で，公共図書館のステレオタイプを利用したキッチュが見られはじめている状況が他方にある。CCC図書館は，ステレオタイプを巧みに利用して公共図書館としての普遍性を獲得しているかのごとく，そのすがたを見せているが，市民社会における「公共」を考えながらそのすがたを現認するとき，まがいものであることの問題点が今後さらに明らかになるのではないか。

他方で，論壇における対抗言論としてのアカデミズムがキッチュの陥穽に落ちるとき，そこでは「公共」への認識が失われるとともに情念の均質化への願望と救済者願望が立ち上り，公共図書館を支える思想的，倫理的な基盤が揺らぎはじめているのである。ファシズムに対抗しようとした者がファシズムに陥りがちであることと同様に，キッチュに対抗しようとしている者もまたキッチュに陥りがちなのかもしれない。

わたしたちは図書館運動をすすめるとき，「情念の均質化」を求めてはいないか，救済者を求めてはいないか，いま一度立ち止まって考える必要がある。

注記

1）新自由主義（Neoliberalism）は，本稿では個人の自由と市場の自由に価値を置き，政府の規制を最低限に抑える「小さな政府」を志向した考え方のことを指す。ミルトン・フリードマン『資本主義と自由』などを参照のこと。

2）公共図書館経営論において，公共図書館の発展を目的とした，主として住民による活動を「図書館運動」と呼ぶ。以下の文献などを参照のこと。
公共図書館サービス・運動の歴史；1，小川徹，奥泉和久，小黒浩司著．日本図書館協会，2006．11．（JLA図書館実践シリーズ；4．）
公共図書館サービス・運動の歴史；2，小川徹，奥泉和久，小黒浩司著．日本図書館協会，2006．11．（JLA図書館実践シリーズ；5．）

3）貸出至上主義について筆者は以前下記の記事を執筆しているので参照していただきたい。なお，注18）も参照のこと。
和知　剛，「貸出至上主義」を考える，図書館情報学研究，図書館情報学研究会，2005．02，3，pp.63-73

4）市民の図書館，日本図書館協会編．日本図書館協会，1976増補.

5）『市民の図書館』をはじめとする，前川恒雄による表記である。

6）図書館運動は，いわゆる「地方自治体が直接経営する公共図書館」を「正統」な公共図書館とみなしているが，筆者は必ずしもその考え方に同調しない。日本の図書館法における用語に過ぎない「公立図書館」という言葉を公共図書館の上位概念として捉えたり，あるグループが翻訳書においてアメリカ合衆国における“Public Library”を「公立図書館」と訳し，New York Public Library（ニューヨーク市公共図書館）を「ニューヨーク・パブリック・ライブラリー」とカタカナで表記したりするという児戯にも等しい行いは，世を誤り学問を冒涜するものであると考える。

7）石子順造（1928－1977）のキッチュに関する文献は以下の書籍などを参照のこと。
キッチュの聖と俗：続・日本的庶民の美意識，石子順造著，太平出版社，1974

8）本稿では触れることができなかったが，「まがいもの」としてのキッチュは，NSDAP（国家社会主義ドイツ労働者党，ナチ）による反ユダヤ主義や退廃芸術展に見られる芸術観への批判として，その同時代の批評において厳しく批判されてきた。詳しくは以下の文献を参照のこと。
ナチズムの美学：キッチュと死についての考察，サユル・フリードレンダー著；田中正人訳，社会思想社，1990．5．
グリーンバーグ批評選集，C．グリーンバーグ著；藤枝晃雄編訳；上田高弘［ほか］訳，勁草書房，2005．4．

9）ゲッベルス：メディア時代の政治宣伝，平井正著，中央公論社，1991．6．（中公新書1025）

10）キッチュの神話化，神格化については注7）で挙げたフリードレンダーが詳しい。

11）「ツタヤ図書館」は蔑称であると考えるので本稿では使用しない。なおCiNii Articlesで「ツタヤ図書館」を検索すると2018年10月10日現在で30件の文献がヒットする。ほぼすべて図書館運動関係者による批判である。

12）本稿を執筆するために多賀城市立図書館を再訪したかったが果たせなかった。そのため，2016年以降に改善された点があるかもしれない。筆者の本稿での評価はあくまで2016年3月時点での評価である。

13) 日経ＭＪ（日経流通新聞）2016年３月30日付

14) 中小都市における公共図書館の運営，日本図書館協会編，日本図書館協会，1963．３．

15) 前川恒雄と滋賀県立図書館の時代，田井郁久雄著，出版ニュース社，2018．２．

16)「出版ニュース」2018年４月上旬号

17) 注16)　ｐ．８

18) なお，以前の論考（注３）で筆者は貸出至上主義の起源を『市民の図書館』としているが，現在では『市民の図書館』に萌芽があったものを，日本図書館研究会読書調査研究グループによる『本をどう選ぶか』など一連の論考が貸出至上主義として発展させたものである，と考えている。そして日本図書館研究会読書調査研究グループによる『市民の図書館』の解釈は「貸出し」に偏ったものであった。わたしが貸出至上主義の原点であるとした『市民の図書館』の解釈を山口氏は批判しているが，山口氏は日本図書館研究会読書調査研究グループによる『市民の図書館』の読解も同様に偏向として批判してしかるべきであろう。

以上